



福
後

中村俊定文庫
文庫 18
344





狻
𪛗
𪛗
講





画き巻上巻

俳諧叢談

後句之事



各句と一氣發動のありありありて自然なりて
 其国の風あり其石の風あり海にて人の氣風
 あつてツツとを忘るるに色意趣よみかきか
 へ通るとさういふ其法と定るに主句と事物
 の姿と先うて自己の情と後うて我意と是と
 そのひく他語とさうの接ひありと初め歌師
 のいふ各句とさう其の句と習ひて他よりと
 うを昔——或人の句——



其句とてさるるに記ししもの曰はれり人知
の通ありて天下の一物なりしは其のまゝに對
してこそいふくあつらひぬとてあつらひた
らんを言語同断のまゝにあらうとて

草花のむすあけきりあつらひ

こゝろとて一物なりしは其のまゝにあらうとて
花を燦々とししは其のまゝにあらうとて物のまゝと
ししは其のまゝにあらうとて其のまゝにあらうとて
まゝにあらうとて其のまゝにあらうとて其のまゝに
あらうとて其のまゝにあらうとて其のまゝにあらう
とて其のまゝにあらうとて其のまゝにあらうとて

はつら

玉のまゝにあらうとて其のまゝにあらうとて

○あつらひのまゝにあらうとて其のまゝにあらうとて

●あつらひのまゝにあらうとて其のまゝにあらうとて

お章のまゝにあらうとて其のまゝにあらうとて
あつらひのまゝにあらうとて其のまゝにあらうとて
あつらひのまゝにあらうとて其のまゝにあらうとて
あつらひのまゝにあらうとて其のまゝにあらうとて
あつらひのまゝにあらうとて其のまゝにあらうとて
あつらひのまゝにあらうとて其のまゝにあらうとて
あつらひのまゝにあらうとて其のまゝにあらうとて
あつらひのまゝにあらうとて其のまゝにあらうとて
あつらひのまゝにあらうとて其のまゝにあらうとて
あつらひのまゝにあらうとて其のまゝにあらうとて

非首録

〇三

カクハ公時ニ酒香
童子ニ時鳥故
此ノ以雅トテモ曰
シ役者ト曰一乃具
ナカラ雅俗ニ地
ノチガイナル例ニ
非踏ハ心ノチアリ
ニシテ其クツツ所
ヲシルヘキ

あつとおそろふ

公何々お不しおお

約リ何々酒香童子ニ故性ハ

それハ公の時ニ酒香童子ト曰一おそれ

趣向ふくおの節ニお彼公何ハお娘の子

おと控口のそりありせよ一向家情のめは

およりお後の故性ニ酒香童子トお家のお

おくとくおつお何のむ文々のおおとよ

お名の鬼おとおとあせつとつとつとつと

お家のおとつとつとつとつとつとつと

五照

相對酒 打割酒
遠い酒 心酒
頃酒

作るを貫し金峰よや中ら秋ノ房ありて意門
す二の通心をよりつと

服之事

服の向を各向とくけて其場を各各事よとつと
服を各向のかけらと補つとつとつとつと
おとつとつとつとつとつとつとつとつと
とつとつとつとつとつとつとつとつとつと
お新あつと服を各向の姿を葉よつとつとつと
ら給よつと其柄の軒あつとあつとつとつとつと
場とつとつとつとつとつとつとつとつとつと

そを袖の服と観おうして例の二句合神
ありと掃除し世様の一新あり又

格子の連ふそらけし中をまうふ

るまふく神のふ。チキ

洗足おまの縁の月こして

洗足の池を少縁の月こして

そを中経の二句合神ありと世様の洗足少縁
向とけしゆりある小服のふまふと神をけし
ふんて先きの句をそくめ我家よりゆりし趣向
ふれし服と中経のふまふのらゆりし後とふ

くの我が家よありしそを趣向中人二句の同ま
らしきし後句におよぬをちりよりあり
けねおよりまありしとけしめんとる趣向ふ
るん趣向をそしりゆりしそを中経よりゆりし
趣向よりちりし二句とそをひおくと格子を後
句におよぬを趣向の用ありお七名八折と格子
唐の割を作おほく中よ東あお流の八折と後
る二法と意門の紀能ありし道よそしむた
階積あり

八折

筆勢のくわくしき其の可き教の如く下例
所会と自由の如く一とくわくしきふくの一
とくわくしき一とくわくしきと死るゝ
とくわくしきとくわくしきと死るゝ
かくわくしきとくわくしきと死るゝ
趣向とくわくしき

その子の罪と女房ははく

その所のんをくわくしきとくわくしきと死るゝ
とくわくしきとくわくしきと死るゝ
とくわくしきとくわくしきと死るゝ
とくわくしきとくわくしきと死るゝ

雑陳二百部
千載集と略り
其の多れとよ
お白り

有心ノ種名
あつては種一
不ありて美と
通しては種一
人の種も他と
之中とち小其人
とよ時ハお白り
のちとよとよ

金と向所とくわくしきと死るゝ
とくわくしきとくわくしきと死るゝ
向所とくわくしきと死るゝ
ひん一相とくわくしきと死るゝ
向の向とくわくしきと死るゝ
とくわくしきとくわくしきと死るゝ
有心と向所とくわくしきと死るゝ
百姓の子息と種の名と死るゝ
とくわくしきとくわくしきと死るゝ
とくわくしきとくわくしきと死るゝ

二句ありて二科二科
ありて二科二科
ハ二科ありて
二人ありて二科
ありて

〇七名ハあ方八科ハ
附方ありて論
一科二名あり有
心附の其人あり
秋附のありて
場ありて適白
天象とも皆一科
二名ありて七名ハ
名ハ八科ハあり
ありて
と白作りと二名あり
一夕は二名あり
七名ハ八科ハ二名
のありてサカイ
とありて

能作身行

きくくく知くくく
所の町を二句の回のせりて二名の運は
害ありて二句の回の子息と抱りて
和吉と向せりてありて
所の町を

後とくくく一ありて父のまは

さあらんよ合くありてくくく
まよと向附の伸る用とくくく

橋ありてありとありと

さあのとありてありとありとありと

さあのとありてありとありとありと
後とありてありとありとありと
トありてありとありとありとありと
合ありてありとありとありとありと
有んありて七名八科の合ありてありと
ありてありとありとありとありと
情とありてありとありとありとありと
下論は田中の松のありてありとありと
ありてありとありとありとありとありと
趣向とありてありとありとありとありと

非皆假名

あつていふらう——さうは回してあつて自
然にあらし人の世もあれはそのひてあつて
いふらう——そのゆへに古今お十福ありて
二書と百その師にありたり

會後坐談

○或人止歳その吟よ「何ぞりてんあつていふらうの
世分と高き教——さういひて假令ハサと道れら
人もいふのれはよほちりて「おのき」と重いふ
いふらう——よ志の家もいふらう——甲よほれ
す——よさうあり「聞——き人よすはよほちりて

うあり——其所の吟あつていふらう

○挨拶のり人と月日はあつていふらうと鳥獸は早ト
いふらう物よよとて時宜とさういふらうと
あつていふらう人の服もいふらう——「唐師
あり貴族もいふらう——何れのものもいふらう
いふらうとさういふらう——

○東をる師ありその命の事よ——盗人のいふらう
いふらうとさういふらう——いふらうとさういふらう
いふらう——遠きものいふらうとさういふらう
いふらうとさういふらう——いふらうとさういふらう
いふらうとさういふらう——いふらうとさういふらう

何れも強くは弱くは——して其情の如きといふ
やの所合の句ぬりもそよ習ふらう——

○凡世もよふ事業のつゝあれとて——他世も此世
端の——しありて平言とて——よふ事業、を以て
余情のらるるを——あれ二字一点よんをけり
らるるを——言ふ論ありきとて——

いけらるるけり。暖縁のいど

いけらるるけり。暖縁のいど

例のまはあ——いけらるるを——とて——
いけらるるを——いけらるるを——又いけらるるを——

とて——いけらるるを——用らるる人の面を
いけらるるを——いけらるるを——いけらるるを——
いけらるるを——いけらるるを——いけらるるを——
他世も所合のありありとて——

○東西の流は養ふ変化の事ありて

之物とて——いけらるるを——

いけらるるを——いけらるるを——

いけらるるを——いけらるるを——

その人れ他世の——いけらるるを——いけらるるを——
の事化とて——いけらるるを——いけらるるを——

この場ありて殊よふれの書きよれと一り此
曲ありて然りと昔人の書きよれと思ふと
はけ。ふふふはゆめけの書とけらふとや
ひくこの場て人は趣向の傷くおとせられ
例の前付けとあるは道の本意とも思ふ
高趣向のこころはふりめはけ意となす
への付意はあらうらうらうら

この飾れまると言ふ

ふふふれと書れと題すと思ふ

一里よふふと題といふ

如きはうらうらふの句は書て一題と趣向
ときふれはあつて男ゆりも思とてはれ
ぬとつた所意ありて一題と一解よとて
使の趣向とてはらふりて男ゆりよけ
らひふら付意あり

○趣向のこころは書とてはらふりて
解の意とて仲間も思とては所代書
らひふれとては趣向といふ
こころは書とてはらふりては
ふらふりては趣向といふ

あゆまらるゝをりし娘や

其産よあやしの産強あつて何とて参るお酒は
男とて力とかつてて迷懐の意もあつるよ
に娘をよれな娘

○趣向のまじり他の付もま場て何のんとも
あつ何の味くも親くもあつらるゝ所行る
と先へ参る可もあつ所とあつらるゝ

○道の奥癒とよよはあつて下ゆふとま
とよよりあつたれら仇階あつよあつ我堂地
改まるるゝ即参る世衆漢のを用るゝ

もあつらるゝや

○宗徑法師能階といふとそら力のと連糸の
かゝるゝあつたれら仇階あつよあつ我堂地
とあつたれら仇階あつよあつ我堂地
をあつたれら仇階あつよあつ我堂地
斯くゆらりのとあつたれら仇階あつよあつ我堂地
月あ柄とあつたれら仇階あつよあつ我堂地
野あつたれら仇階あつよあつ我堂地
んまるとあつたれら仇階あつよあつ我堂地
とあつたれら仇階あつよあつ我堂地

人のまはれよれと云ふ所んよと云ふは此後を
信徳の名ありと云ひ知るる

○東花を師伊勢の國より故郷よりきたりて
別めを余のどののちよ

入道

と云ふ所の儀式の今よのまかへありて
是と不定のまよと云ふは自正と云ふんよ
よよと云ふのちよ

信徳のちよと云ふ

と云ふ所の人よと云ふるよと云ふは
今よのまかへありて

と云ふ所の鑑よりんやよと云ふは
此のまかへありて

右画一巻の畫信徳安議前軍

の心得よと云ふは後学の為よ

思ふよと云ふは其日其時のまかへ

師と思ふよと云ふは罪ありて

